

報告

北海道スタンダード研究委員会 第17回勉強会

北海道の活力とウィンタースポーツの振興

～二人のオリンピックのメダルまでの軌跡～

天 沼 宇 雄

1. はじめに

今回は、道民に馴染みの深いウィンタースポーツを通じた地域振興や地域づくりについて、リレハンメル・オリンピックのスキー複合団体金メダリスト阿部雅司さんと、バンクーバー・パラリンピックのparaアイスホッケー銀メダリストの永瀬充さんにご講演していただいた。

□講演 1：金メダルへの道のり

～つらい時こそ笑顔で～

講師) 名寄市特別参与 阿部 雅司 様

□講演 2：パラリンピックの魅力

講師) 北海道新聞パラスポーツアドバイザー
永瀬 充 様

□日 時：2018年7月13日(金) 18:00～

□場 所：TKP ガーデンシティ札幌駅前

□参加者：22名(会員15名、会友2名)

2. 講師 阿部雅司氏のご紹介

阿部さんは、留萌管内小平町出身、日本を代表するノルディックスキー複合の選手として活躍後、ナ

ショナルチームのコーチを務め、ソチ・オリンピックでコーチを引退。2年前、名寄市役所からスポーツでまちを盛り上げて欲しいと誘われ、以後、スポーツ全般を通じた地域振興に向けて活動。「今回の平昌オリンピックでは、渡部暁斗選手が、直前のワールドカップを連勝して迎えたオリンピックだったが、直前に肋骨を骨折、痛みを耐えて個人ノーマルヒルで2大会連続の銀メダルを獲得してくれた。」とかつての教え子の活躍をうれしそうに話す。

今回の平昌オリンピックで日本は多くのメダルを獲得したが、「(技術士の)皆さんに注目して欲しいのは、モーグルで入賞した(国内外の選手)全員がメイド・イン・ジャパンのスキーを使っていたこと。それも従業員が4、5人のメーカー。」だそうだ。日本メーカーの技術力の高さを証明する出来事である。また、渡部選手が使用しているインソールも話題となった。このメーカーは、複合チームのサポートもしているそうだが、アスリートの成功の陰には、メーカーのサポートも重要な要素だという。

阿部さんは、自身の金メダルをたくさんの人、特に子供達に触っていただいている。その金メダルは、既に金メッキが剥げて銀メダルのような風合いになっていた。それでも阿部さんは、「金メダルを獲った瞬間、たくさんの人にお世話になり、とらせてもらった。」という気持ちになったという。それから「支えてくれた周囲の人たちへの感謝と恩返しばかり考えている。」ということで、メダルをいろいろなところへ持って行き、触ってもらっているのだそうだ。

(1) 講演概要～金メダルへの道のり

ノルディック複合は、ヨーロッパでは“キング・



オブ・スキー”と言われる。ジャンプの瞬発系とクロスカントリーの持久系の両方を併せ持ち、両立しないと勝つことはできない。一時期、オリンピック・世界選手権と日本が4連覇して日本が世界最強の時期があった。その過程で、3度のオリンピックを経験。1回目はカルガリー、まずは出ることが目標の大会だったが、個人戦31位、団体は最下位を免れての9位。オリンピック後、この成績に満足できず再チャレンジを誓う。

二回目は、アルペールビル・オリンピック。その前年、日本人として初めてワールドカップの表彰台に上がり、世界選手権では団体銅メダル、今回こそはと意気込んでオリンピック・イヤーを迎えた。しかしこの年、スキージャンプは、V字ジャンプの登場で大変革を迎える。自分は前年の調子が良かったので、V字ジャンプにチャレンジしなかったが、いざオリンピックシーズンが始まると、V字ジャンプの選手が活躍し始め、クラシックスタイルの選手が上位にいけない状態が続いた。そうした中、オリンピックが開会、個人戦、日本選手の中で一番成績が良かったのはV字ジャンプにチャレンジしていた荻原選手。自身は、個人で30位。結局、4年前(31位)から1つしか順位が上がらなかったのは、V字に取り組まなかったせい。世界を目指している選手は守りに入っていけない、自分も挑戦すべきだったと悔いた。個人戦が終わり、団体戦。各国はV字ジャンプに取り組む選手とそうでない選手が入り乱れ、本命不在の大混戦。自分は、日本チームのキャプテンで、前年に日本人選手で最高の成績を残していたので、団体戦のメンバーには当然選ばれると思っていた。しかし、団体戦のメンバーが発表され、自分は選ばれなかった。何故自分が外されなければならないのか。その場にいることができず、コースに出て滑りながら泣いた。段々と(自分がメンバーから外されたことに)腹が立ってきたが、コースの残り1キロの看板が見えた時、このふてくされた気持ちを表に出したら、みんなのやる気を削いでしまうと思った直後に自分は涙を止めて、「明日、俺の分も頼むな。」と仲間伝えた。そう言うのが精一杯だった。そして、みんなが「阿部さんの分までがんばる」と言ってくれたのがうれしかった。

試合当日、みんなの荷物持ちやスキーテストなど裏方の仕事を率先して行ったが、それを選手達が見ていた。

荻原選手は、「選手村にはチームメイトのスキーを黙々と磨く阿部さんの姿があった。夜暗くなるまで、当日も、俺の分まで頼むぞという気持ちでいてくれた、この阿部さんの姿勢が選手達の気持ちに火を付けた。」と語ってくれた。キャプテンがメンバーから外され、裏方の仕事をしていることが、選手達に良い意味で刺激になったようで、札幌オリンピックの笠谷幸生さん以来、冬季オリンピックでは、日本で2個目の金メダルを獲得した。

その後、心の中では引退を決めていたが、日本に帰国する際に、妻から赤ちゃんができたという電話をもらう。生まれてくる子供に自分の走る姿を見せたいと思い直し、引退を翻意。そして、また一から練習して、次の全日本選手権では金メダリスト達を押さえて優勝。そして、夏冬のオリンピックが2年おきの交互開催に変更されたため、すぐ翌年にリレハンメルが開催されることになり、3度目のオリンピック代表に選ばれた。しかし、この年はジャンプの調子が悪く、大会では上位に行けず、オリンピックの開会を迎える。個人戦では、やはり前半のジャンプで出遅れた。しかし、クロスカントリーでは、これが自分の最後のレースになるかもしれないと思い、本当に苦しかったが、思いっきり“笑顔”を作って、目一杯大観衆の応援に応えながら走ったところ、4番目のタイムで走りきり、最終的に10位という結果を得た。

そして因縁の団体戦。この時点で日本は金メダルがゼロという状況。期待のジャンプ団体戦で原田選手が失敗ジャンプした時である。必然的に複合にかかる期待は一段と大きく、すごいプレッシャーがかかったが、開き直り、K点越えの大ジャンプ、荻原、河野選手につなげ、クロスカントリーでも、“笑顔”で走り続けて、ライバルノルウェーに大差を付け、日本チームは2大会連続の金メダルを獲得。表彰式で荻原・河野の両選手が自分を担ぎ上げてくれて感動した。二人は「前回のオリンピックでは、補欠

で悔しい思いをしたのに、(裏方として)支えてくれた阿部さんにメダルを獲らせた。」と話していたという。もし、(リレハンメルで)自分が補欠になった時にふてくされていたら、この金メダルは無かった。荻原選手は、当時のことを後にこう語っている。「アルベールビルでのいろんな苦労や苦悩があって、それに負けない阿部さんがいたから、我々もここまでこられた。自然とその阿部さんを称えなければというのが率直な気持ちだった。」と。

翌年、世界選手権ではルールが変わって、団体メンバーは4人になったが、そこでも阿部さんを含む日本チームは金メダルを獲得。そしてワールドカップ最終戦の札幌開催で自分は引退した。引退後、ナショナルチームのコーチになり19年間、指導者として活動したが、教え子の渡部暁人選手が活躍し、コーチとしてもメダルを獲得する喜びを感じることができた。

(2) スポーツを通じた学校教育とアスリートの育成

今は、名寄市の特別参与として、スポーツ全般に関わっているが、昨年からは国立スポーツ科学センター(JIS)からトレーナーを名寄に招き、一緒に学校に出向いて体育の授業の改善プログラムや、北海道で優秀なスポーツ選手を発掘する“タレント発掘事業”、あるいは発掘した選手のトレーニングのサポートをしている。

また、育成中のバイアスロンの選手を名寄で強化して欲しいとの依頼もあり、名寄で北京を目指す選手のクロスカントリーや射撃のトレーニングを指導している。

学校の体育の授業では、直接出向き、運動が得意、不得意に関係なく、コーディネーション・トレーニングなどでスポーツの楽しさを教えている。また、トレーナーが、子供達に走る基本的な動作を直接教えながら、パンフレットにQRコードを付けて渡し、親が子供に携帯で、走り方の動画を見せられるように工夫している。

冬は、小学校で歩くスキー事業も行う。東京にはJISのナショナルトレーニングセンターがあるが、名寄ではそういう施設がない。大学や病院と連携するなど工夫して、東京に近いシステムを目指している。

また、我々の指導だけでは限りがあるので、地域の子供を指導する人の質を上げなければならないと感じ、ジュニアの指導者を養成するプログラムを立ち上げて取り組んでいる。

名寄市から活躍する選手が輩出されれば、地元も盛り上げることは間違いないので、そうした活動を続けていくことが地域の振興につながる。カーリングなどは小さな町からオリンピックメダリストが出たということで、地元が大いに盛り上がった。スポーツは人を元気にする力がある、道民が元気になるような活動をこれまでもがんばっていききたい。

3. 講師 永瀬 充氏のご紹介

永瀬さんは、1976年生まれ、出身は旭川市。中高はバスケット部でスポーツの好きな普通の少年であったという。高校時代に運動機能に障がいを持つ病気を発症。治ることを信じて治療をするも、最終的に治らないとわかり、運動が好きだった永瀬少年は、夜になると一人病院のベッドで泣く日々を過ごす。本人曰く「それからの4年間(15歳~19歳)は、“虚無の時期”を過ごした。」という。その後、「高校卒業後、祖父母の家から通える関東の大学に進学したが、半年でやめ、旭川に帰り、2回目の入院。それでも良くはならず、膝から下がまったく動かない状況の中で、震えがあったり、筋肉が落ち、大きな荷物が持てなくなるなど、夢も目標も無く、ただなんとなく過ごす日々が続いた。」という。永瀬氏が19歳の1995年、日本初の障がい者スポーツ雑誌が発売される。「これが障がい者にとって、大きな時代の変



化であった。」と振り返る。何故ならば、その3年後の1998年に長野でパラリンピックが開催されることが既に決まっていたからである。必然的に日本もパラ競技の振興に取り組み始める。永瀬氏は、この時パラリンピックの存在を知り、北海道では馴染みの深いアイスホッケーに興味を持ち、パラアイスホッケーに取り組みたいと思うようになる。「たまたま北海道新聞の夕刊に北海道でもチームができるとの記事が掲載され、記事の中にあつた連絡先に電話をし、旭川から車で4時間かけて苫小牧に練習に通うことになったのが、自分の中では転機になった。」という。

(1) 講演概要～銀メダルへの軌跡

長野パラリンピックは、自国開催ではあつたが、予選リーグで敗退する。勝たなければ決勝にいけないという大事な試合カナダ戦にゴールキーパーとして出場し、第2ピリオドまで1-0の接戦を演じたが、結果的に第3ピリオドで2点を決められ、3-0で負けてしまう。最後は悔しくて涙を流しながらプレーしていた。その悔しさが、パラリンピックに出たいという気持ちから、パラリンピックでメダルを獲りたいという気持ちに自分を変えた。しかし、次のソルトレークシティは5位、3回目のトリノは、ちょうど30歳の時で期待が高かつたが予選リーグで敗退。この時、負けてチーム内の雰囲気が悪くなり、ロッカールームで互いがぶつかり合うなどしてチーム内が崩壊し、最後はひどい精神状態でプレーしていた。精神的にも肉体的にも落ち込み、もう競技を引退しようと思ったが、帰国して多くの方から励まされ、その後時間の経過とともに他のチームメイトやスタッフとも会うようになり、自分の夢がかなわず、自分だけがつらいと思っていた。でも実はみんながしんどかつたんだと気づき、夢は自分一人のものではなく、家族や応援してくれる人みんなの夢であり、その夢を実現するために自分はリンクの上に立って、それを実行できるチャンスももらっている。それを終わりにするのも、活かすのも自分次第だと思い、「もう一回やってみよう。」という気持ちになった。それから3年間バンクーバーを目指し、チャレンジし続け、3年後、日本は

世界ランキング4位にまでなつていた。ただ、「(日本は)上の3つにはどこも勝てない。」とも言われていた、日本の予選リーグは、アメリカ、チェコ、韓国という組み合わせ。アメリカには勝てなかつたが、チェコ、韓国に勝ち、2位通過。もうひとつ予選リーグ1位の地元カナダとの対戦が決まる。カナダはアイスホッケー王国で優勝候補。それまで日本は、カナダに1勝しかしていなかつた。完全アウェイの中、試合開始。第2ピリオドで同点に追いつき、第3ピリオドで逆転に成功、カナダはついにゴールキーパーをベンチに入れて全員攻撃、しかし試合終了直前にも日本の返したパックがキーパーのいない無人のゴールへ吸い込まれ、3-1で勝利。決勝では、アメリカに0-2で負けたが、銀メダルを獲得。その後、平昌も目指したが、今度は病気が進行し、スティックが握れなくなり、ついに引退となった。

(2) パラリンピックの魅力

それまでは福祉関係の仕事をしていたが、東京オリパラが決まり、札幌オリパラの招致運動も始まり、パラリンピックに対する関心が高まる中、講演会などの依頼も増え、今後どうしようか思案していたところ、道新のフォーラムの講師に呼ばれたのがきっかけで、北海道新聞社で引退後のアスリート雇用ということで現在の北海道パラスポーツアドバイザーになった。今は、私が当事者としてお手伝いしたり、記事を作ったり、講演会活動や普及活動を進めている。

パラリンピックの歴史は、オリンピックとは大きく異なる。近代オリンピックの第1回は、1896年フランスのクーベルタン男爵が提唱し、ギリシャ・アテネで始まる。パラリンピックは、1960年にイタリアで始まり、それ以前から障がい者の国際大会が徐々に開催されていた中で、1988年のソウル大会をきっかけに、遡ってパラリンピックにしたもの。日本の初参加は、オリンピックが1912年だが、パラリンピックは1964年の東京。2020年の東京はオリ、パラとも二回目の開催となるが、実はパラリンピックの2回目の開催は東京が世界初である。2020年東京大会の種目数はオリンピックが339

種目、パラリンピックが537種目。出場選手としてはリオ大会ではオリンピック1万1千人に対して、パラリンピック4千人となっている。パラは障がい別に競いあうので、障害の程度別で種目が分かれている。ここがわかりづらいと言うことで、現在改善が進められている。パラの第1回は60年ローマ大会としている。64年東京ではオリンピックと同時に開催していたが、実は、その後5大会は、イスラエル、オランダなど別な場所で開催されている。これは、当時メキシコやソ連などの共産圏においては障がい者に対する理解が進んでおらず、障がい者スポーツが普及していなかったためである。1988年からは正式にパラリンピックというイベントができあがり、今に至る。

冬季オリンピックの第1回は、1924年フランスのシャモニーで始まったが、冬季パラリンピックの第1回はスウェーデンのエーンシェルドスピーク。その後、ヤイロ、インスブルックなどを経て、アルベールビルからはオリンピックと開催地が一緒になった。

パラリンピックは、まだどのような競技があるか知られていないが、比較的メジャーな陸上、水泳以外にも多くの競技がある。柔道は視覚障害の方が、組んだ状態から始めるので、豪快な投げ技などが見られて、健常者の柔道よりもむしろ本来の柔道らしくておもしろい。アーチェリーは、オリンピックの方に車いすで出場した方もいる。バスケットは、車いすバスケットが有名になってきた。サッカーは視覚障害者のブラインドサッカーが、キャプテン翼の高橋陽一さんが漫画に書いてくれて、NHKでも放送され、広まってきている。フェンシングは、第1回から行われている。テコンドー、バドミントンは2020年東京から採用される。車いすテニスは、国枝選手が有名。夏は22競技だが、冬は6競技で、アルペンスキー、クロスカントリー、ホッケー、車いすカーリングなどがある。もともとスキーは、片足の方が滑るようなところから始まった競技。スノーボードも平昌パラリンピックで成田緑夢選手がメダルを獲った。メダルは、夏のオリンピックは、ニケのデザインが必須なので、大体決まってしまう

が、パラリンピックはデザインが自由なので、おもしろいデザインが出てくる。来年の夏くらいに東京の発表があるようなので注目したい。

パラリンピックの理念のお話をしたい。パラの大事な考え方は、「失われたものを数えるな、残されたものを最大限生かせ」である。できないことを悔やむのではなく、何ができるかを考える。手があるから手を使う、手が無いなら口を使ったって良い。

ソチパラリンピックの時には、こういう言葉が出てきた。「“Impossible”をちょっと工夫してみよう。I'm possibleになるよ。」、ちょっとした変化で、不可能が可能になる。パラリンピックは、多様性と共生社会を大切にしている。

ある車いすマラソンの大会で、大会スタッフが先頭のひとのコース誘導を間違っしまい、慌てて自転車で追いかけたが間に合わなかったということがあった。それだけ車いすはスピードが出る。ちょっとした石で躓くと大げかになる。こういう迫力がある競技もパラリンピックにはあることを知ってもらいたい。

(3) 東京オリパラ・札幌オリパラに向けて

私は、バリアフリーという言葉が嫌いで、バリアフリーという言葉がバリアになっていると思っている。既に古いし、バリアというのがネガティブな言葉で、バリアフリーという時点でバリアを考えてしまっているのがバリアだと思う。もともとはハード的なものを変えようという発想だったと思うが、最近は“心のバリアフリー”という言葉も使ってきてはいる。でも、何かうまくいっていないと感じる。

個人的には、今すごく大事にしているのは、“アクセスビリティ”ということ。情報へのアクセスとか、活動へのアクセス、選択への権利など、果たして東京の地下鉄はバリアフリーになっているか。確かにバリアフリーにはなっているが、普通の人が簡単にいけるところを我々はぐるーっと15分かけて回ってやっと到達する。それをバリアフリーと言うのか。

長野オリンピックの時は、今まで車いすの人が行けなかったところに行けるようになって良かったねというスタンス。でも、バリアフリー法ができて、

80年代の建物と90年代後半からでは大きく建築の仕様が変わった。当時は、そういうバリアフリーで良かったが、今はどういう手法で、そこまでいけるかが大事。

サッカーをゴール裏から見たいとか、上から見たいとか、そういうニーズをかなえようというのが世界の考え方の主流。東京に向けた準備では、ただそこに車いすの席があれば良いという発想ではダメ。電車も何両編成であっても、席が一つあれば良い、ホテルにしても、田舎のホテルでも、東京の大きなホテルでも、とりあえずバリアフリーの部屋が一室だけあれば良い、そんなことではない。そういう法律になっているからというのは違う。どういう風にアクセスしてくるのかを考えるといろいろなものが変わってくるし、見えてくる。

この東京オリパラを契機に、多様性ということを知ってもらいたい。そして、これを契機にバリアフリーを考え直そうとか、見直そうとか、そういう風に考えてもらいたい。

札幌の招致が、26年か、30年かという議論がある。実は、冬季オリンピックで、街の中心部に雪がある開催地というのは札幌くらい。これまでどどの開催地も山には雪があるが、街には雪が無い。車いすの人が、ホテルを予約したけど、ロードヒーティングのエリアから出られないというのでは困る。街中で、冬のバリアフリーを考えなければならなくなったというのは、おそらく札幌が世界初。そこをうまくビジネスにつなげられれば良いとも思っている。

(4) パラ競技の普及

パラスポーツの競技人口についてだが、陸上は、陸上連盟登録者42万人に対して500人、バスケットボールは63万人の競技人口に対して車いすバスケットは600人。人口比で見ると総人口1億1千万人に対して、身障者手帳を持っている人は400万人だが、重度の人やお年寄りもその中には数えられているので単純比較はできないが、もっとパラ競技の人口が増えても良いと思う。

残念ながら地方に行くと、仲間もいないし、ノウハウもない。どこでどうやっているのかわからない

というのが実態である。障がい者スポーツをやっている人のネットワークを、できるだけつなごうとするわけだが、事例を探して活かそうとしても、なかなか見つからない。このため、行政にもゼロから作りましょうという話をしているが、前例がないものは行政もなかなか動くのが難しいらしくて進まない。

どこの町でもどこの島にも障がいのある方はいるので、私は、高校生の時に、健全な人と分けられて嫌な思いをしたので、そういう思いをする人が何千人いるかでは無く、もし一人でもいたら、それは社会としてなんとかできたらと思う。よくいろいろな人から何ができますかというお話を言われるが、パラリンピック、パラスポーツをこういうような機会に知ってもらったり、イベント、大会などもやっているの、体験してもらったり、見に行ってもらったり参加したりして欲しいと言っている。

スポーツクラブとか団体でも、障がい者スポーツをやっている人を受け入れようとか、そういう活動が広がって欲しい。特に上を目指す選手は、北海道にも結構出てきているが、金銭的なサポートも必要という中で、協賛とか、寄付とか、企業による雇用も大切になってくる。スポーツも生かしながら、仕事と両立しながらという中で、東京オリパラに向けて障がい者の雇用率も上がってきているのは良い傾向。こういう取組が今後も連動して行って欲しいと思っている。

〈意見交換〉

Q) ウィンタースポーツの人口が少しずつ減ってきているという話を聞いた。北海道はウィンタースポーツに優位性がある地域で様々な種類の競技ができる環境にある。今後競技者を増やすには、どういう取組がいいのか。

A) 平昌とソチで幕別町から多くのオリンピックが出た。冬はスケート、夏は自転車とか、いろいろな種目を子供の時にやらせながら、得意な種目を伸ばしている。今、子供の数が少なくなり、競技関係者は、早くから競技をやらせて、つばをつけておくという風潮があるが、そういう子供達は意外と伸びていかない。陸上関係の雑誌で紹介された話だが、小

学校時代に競技を始めて活躍した選手でオリンピックでも活躍した選手はゼロ。小学校で走るのが速くてオリンピックで走った選手はゼロ。むしろ、小学校で競技を集中的にやっていない選手がその後伸びている。そういう傾向を日本の指導者は学ぶべき。今回、平昌オリンピックで一番メダルを獲ったのはノルウェー。北海道とほとんど同じ人口なのに39個もメダルを獲得した。ノルウェーのクロスカントリーの指導の特徴は小学校、中学校で詰め込まないこと。その結果、それ以降に伸びている。小学校では、むしろ様々なスポーツをやらせるように指導しているそうだ。種目によっては早い時期から始めなければならないスポーツもある。水泳、卓球などがそうだが、ノルウェーは逆にそういうスポーツの選手が育っていない。そういった各国の取組や傾向を指導者が理解していると、もっと日本にメダリストが出てくると思う。(以上、阿部氏)

A) パラの視点で言うと、バイスキーというものがある。スキーできない子供が介助してもらい乗っているが、障がい者のためにと考えるのではなく、スキーができない人のためにと考えると、(競技人口を増やすのに)もっと使い道があると思う。孫とおじいちゃんが一緒に遊ぶのに使える。外国には、それまでスキーに乗ったことがないという人が多いが、そういう人が日本のスキー場に来て、スキーを付けるだけで1時間も掛かっている。それをこのバイスキーを使えば、すぐに乗れて、スキーのおもしろさを味わって帰ってもらえる。パラ競技の器具について、そういう使い方を考えることも大切。スキーに乗らずにゴンドラだけ乗って、雪の景色を味わって喜んで帰る外国人観光客がいる。アジア系の方は雪を見るだけで興奮する。そういう機会をうまく活用することもウインタースポーツに向かわせる機会になる。

〈終わりに〉

“元気な北海道づくり”はもとより、“人材育成”という点でも大変参考になるご講演でした。阿部さんの「このメダルを獲ってからは、支えてくれた周囲の人たちへの感謝と恩返しばかり考えている。」というコメントと、永瀬さんの「失われたものを数え

るな、残されたものを最大限生かせ。できないことを悔やむのではなく、何ができるかを考える。」という言葉が印象的でした。

天 沼 宇 雄 (あまぬま たかお)

技術士(建設/総合技術監理部門)
北海道スタンダード研究会 代表

